北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

C.Marlowe の Imagery : Tamburlaine the Greatpart I の場合

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2012-11-07
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 渡部, 一雄
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00001053

C. Marlowe の Imagery

——"Tamburlaine the Great" Part I の場合——

渡 部 一 雄
北海道学芸大学釧路分校外語外文教室

Kazuo WATANABE: C. MARLOWE's Imagery
— in "Tamburlaine the Great" —

序　　論

最近, Calvin Hoffman が, Shakespeare=Marlowe を力説して話題を賑わし, Sir Thomas Walsingham の墓発きをした事は有名なことであり, 記憶に新たである。もっとも, この度の墓発きは失敗したが, 過去, 例えば, 1897年の W. G. Zieglar の様に, この様な説が, 時々, 出現した。しかし, その度に, ある程度の説得力を持ち, 人の心を奪っている。その第一の理由は, 先ず Shakespeare の代替人がほかならぬこの C. Marlowe であるからだ。この度の Hoffman の力説しようとしている点は, 次に, 生年月日の問題であり, Marlowe は実は例の Deptford で殺害されていないというのである[1]。即ち, Sir Walsingham が, そこで Marlowe が殺害されたようにし, 彼を墓穴に入れた事にして, 地下にもぐらせた, というのである。

Marlowe が殺害されてから4ケ月後の1593年9月に, William Shakespeare 作と扉に記入された "*Venus and Adonis*" が世に出たが, この W. Shakespeare という名前が出たのは, これが最初だと力説し, さらに, Shakespeare の30歳までの生涯の記録は皆無に等しい, と述べている事は周知の通りである。

Alfred Hart や, その他の人々が, 語学的見地から論文その他で, この説に反対している様である。

この小論は, 以上の問題にも関連してくるが, 紙面の都合上, 彼の23歳の時の力作 "*Tamburlaine the Great*" の第一部だけを研究の対称とし, 文学的に, 宗教的に, 生理学・地理学的に分析, 考察し, 一般に考えられている様な, 流血, 征服慾, 或は, 傲然たる大獅子吼といった表面的なものではなくて, もっと, 彼独自の, 詩人としての想像力, パノラマ式の心像 (imagery=mental images) を解明し, 彼の論理的構成形式を把握して, ルネッサンス万能の気風を最大限に発揮し, 英文学史上画期的な地位を確保しているこの作品を再評価したい, というのが主たる目的である。

なお, この論文は, 昭和33年以来, 発表して来た C. Marlowe に関する一貫した研究の一部である[1~5]。

1. ギリシヤ・ローマ悲劇の影響

この作品 "*Tamburlaine the Great*" は, 前に述べた様に, 再度, Shakespeare に擬せられる程の天才詩人, 天才劇作家, C. Marlow が, わずか23歳か24[1] 歳の頃, 即ち, 1587—8年の冬にアジアの英雄 Timūr の伝記を骨子として, 超人的野望, 征服慾を主題として, 第一部五幕を完成した。続いて, 第二部五幕が創作され, のべ4,628行の5音歩無韻詩, Blank Verse から出来ている。

この様に，Timūr の伝記に依拠しているが，第一に彼の imagery の骨格となっているローマ・ギリシヤの影響を比較検討し，考察してゆきたいと思う。第一部全体の中で，これに関係しているものを列挙すると，

(1) ギリシヤ的依拠

II. vii. 18〜29. その他……Aristotle の思想
III. iii. 104. Harcules……Pinder, Nem. I. 神話
III. iii. 109. Typhon's loins……Hesiod の theog. 306 ff.
IV. ii. 49. Clymene's brainsick son……日神 Helio の子. 神話
IV. ii. 96. Plato's wondrous year……Platon, "*Timaeus*"[6] 39. D.
IV. iv. 9. Jason Colchos' golden fleece.……ギリシヤ伝説
IV. iv. 17. Ye Furies, that can make……Musaeus. "*Hero and Leander*", の最初の個所
IV. iv. 24. Progne.……ギリシヤ神話の Philomela の妹 Procne の事
V. ii. 231. darkness with her rusty coach……上記 "*Hero and Leander*"
V. ii. 271. check the ground……同上. II. 143〜4.

(2) ローマ的依拠

II. vii. 13. the eldest son of heavenly Ops.……Ovid が書いた Jove の生涯の影響あり。
III. iii. 104. Hercules……Ovid, Metam.[7] IX. 182 ff. 及び 136 ff.
V. ii. 70. Thessalian drugs……Ovid, Metam. VII. 264.[8]
IV. ii. 49. Phaëthon……Ovid, Metam. I. 750 ff. 及び II. 1〜366.
IV. iii. 4. Cephalus……Ovid, Metam. vii. 762 ff. 及び vi. 681.
IV. iv. 17. Furies……Ovid, Metam. IV. 450 ff.[9]
IV. iv. 24. Thrácian King……Ovid, Metam. 565.
V. ii. 171. Styx……Virgil の使用する用語
V. ii. 193. the Stygian snaks……Ovid. Metam. IV. 490.
V. ii. 231. drakness with her rusty coach……Virgil. Aeneid. V. 721.
V. ii. 318. Turnus 'gainst Aeneas did……Virgil. Aeneid. VI.
V. ii. 193. the stygian snaks.……Ovid の他 Seneca. De Ira III. 35·5.

上記の中には直接引用した用語ばかりでなく，彼が参照したもの，即ち，創作の際心像に画いていたものも入っている。各分野に別れる複雑なこの心像は，作者を地下にもぐらせて，偽名を使用したとしても覆い隠せるものではない。

彼が1579年1月14日 King's School に入学し，Cambridge 大学の Corpus Christi College 時代，更に，M. A. 授与までの履歴と，上記の作品個所とを比較検討した場合，結論としていえる事は，Marlowe は Aristotle 主義者であり，ローマよりはむしろ，ギリシヤ的精神の持主であったという事である。

周知の通り，Aristotle の説では，Drama とは，模倣する事であり，rhythm を愛することである。又，ギリシヤの悲劇作家，例えば，Aischylos, Sophokles, Euripides, Aristophanes たちが，作品の題材を，慣習通り，神話伝説から取材したが，Marlowe は，実在の人物 Timūr の生涯にそれを求め，この作品の Prologue で述べている様に，今迄の「歌を歌っても親譲りの才能しかない輩の跳ね飛び踊りの気分から，或は又，田舎者なら金を出してやる様なうのぼれた思いつきから脱皮して」[9] これが悲劇の亀鑑であると大言壮語して，ロンドンの舞台から世に問うた一大野心作なの

である。rhythm と conceits を骨子として，実在人物を同化融合し，最高度に達した点に於て再生しようとしたところに，彼独自の芸術性を発見するのである。

この作品を一層明瞭なものとするためには，上記まで遡る必要があり，更には，Aristotle よりは，Appollonia の教義まで遡って究明する必要がある様だ。

ギリシヤは，キリスト教以前のものであるから，この様に大きな影響を受けていた Marlowe が，容易に Christian の世界に入れるとは考えられない。それに Aristotelianism[5] が拍車をかけている。

ギリシア的精神とは，キリスト教に反対し，反動的であり，反宗教的な要素を含んでいる。この事は，Marlowe が無神論者だといわれた問題を解決するのに重要な一つの鍵ともなろう。この imagery については後程述べる事にする。

さて，彼の依拠しているのは，上記のものの他にまず考えられる事は，Pedro Mexia (1496～1552) があり，更に，Edmund Spenser が挙げられると思う。

例えば，"*Faerie Queene*" の I. i. に登場する Errours, 或は又，V. ii. 193, V. ii, 231 などの imagery は，Marlowe のこの作品の V. ii, 192–5, 或は，V. ii. 231 と全く同一である。

Errours (I. i. xviii)(迷妄) の様子を，Spenser は次の様に述べている。

There with she spewd out of her filthie maw
A floud of poyson horrible and blacke,
Full of great lumps of flesh and gobbets raw,
which stunck so vidly, that it forst him slacke
His grasping hold, and from her turne him backe. (I. i. xx)

(そこで，怪獣は，汚ない胃袋の中から，大きな肉の魂や生の肉の小片が一ぱい入っている恐ろしい真黒な毒汁を吐き出した。) 更に，xxii では，

The same so sore annoyed has the knight,
That, welnigh choked with the deadly stinke,
His forces faile, ne can no lenger fight;

(その騎士はそれに非常に悩まされ，恐ろしい悪臭のため窒息されて力が衰え，闘う事さえ出来ない程であった。) これにたいして，Marlowe の表現は，

Baj. O life, more loathsome to my vexed thougts
Than noisome parbreak of the Stygian snakes
Which fills the nooks of hell with standing air,
Infecting all the ghosts with curless griets! (V. ii. 192–5)

(おう，生きる事，それは，あの立ちこめる空気と共に，地獄の隅々まで満し，あらゆる亡霊たちに不治の苦痛を感染している三途の川の蛇たちの，悪臭あるヘドよりも，もっと，この悩める心にとっては胸わるくなるものだ。)

以上の様に，ローマ，ギリシヤの精神を骨子として，その知識を複雑精妙な技巧で導入し，作品全体に宗教的次元を与え，宗教的背景を創作しようとしたのである。

2. 宇　宙　観

Marlowe の宇宙観には特種な imagery がある。もっともこの問題と宗教観，道徳観とは密接な関係をもっているのであるが，先ず考えられる事は，万物の最高位に，Nature をおいている事で

ある。そして，この Nature がこの物質の世界を支配する力であり，運命や星を支配する力であって，この世の種々なる現象を作り出す最高のものである，としている。運命とは，運命の女神をも考えてはいるが，やはり，自然に支配されており，星も，他の影響を受け，命令を受けて，種々なる事件を生み出すものである。

神話においては，神々の王であり，天の支配者である最高の神，Jove，あるいは Jupiter でさえも次のように自然 (Nature) の下位にある。そして，次の様に，

Tamb. What better precedent than mighty Jove?
Nature, that fram'd us of four elements
Warring within our breasts for regiment,
Doth teach us all to have aspiring minds: (II. vii. 17–20)

(最高の神 Jove より優れているものは何だ？　自然だ。これが吾々を四つの成分で作り，この成分が，吾々の胸の中で，最高の地位を求めて戦っているのだが，この自然が，吾々皆に，大志を抱く精神を持つ事を教えているのだ。)

自然が，人間を創造し，精神を与えているという magery を持っている。同様な例が，第二幕，第一場 (36—6) その他で見られる。

次に，この Nature に支配されている Fortune と，Furies とを，作者 Marlowe は，明瞭に区別はしていない。次の個所は，Tamburlaine の捕虜となった Bajazeth が虐待され，呪って言い返している台詞であるが，

Baj. Fall to, and never may your meat digest!
Ye Furies, that can mask invisible,
Dive to the bottom of Avernas pool,
And in your hands bring hellish poison up,
And squeese it in the cup of Tamburlaine! (IV. iv. 16–20)

(食い始めろ，そしたら，決してお前の肉は消化しないぞ！　復しうの女神よ，人目につかぬように仮装出来る女神よ，地獄の沼底にもぐって，お前の手に，地獄の毒を持ち来り，それをタンバレンの杯の中に絞り込んでくれ！)

この中の「人目につかぬようと仮装出来る女神，とは Furies のことであり Fortune のことであって混同した imagery を持っている。この様な imagery は Ovid. *Metam.* IV. 450 ff から出ている様だ。

次に，Tamburlaine と星との関係は，

Cos. Then strike up, drum: and all the stars that make
the loathsome circle of my[10] dated life,
Direct my weapon to his barbarous heart,
That thus opposeth him against the gods, (II. vii 36–40)

(太鼓を打ち鳴せ；彼の生誕を寿命ずけるいまわしい軌道をつくっているあらゆる星は，この様に神に反抗する彼の野蛮な心臓に，私の剱を向けさせてくれる。)

の台詞で充分察知出来る。結局，Nature の指令で星が主人公を支配しているが，一方，Nature が主人公を四成分で創造し，大望を抱かせ，その結果，主人公は神々に反抗するという過程が生まれてくる。

この様な imagery を生んだ根源は，後に述べるシャーマニズと，Sāhib-i Kirān の意味内容か

らの暗示にある。すなわち，Marlowe は実在の Timūr が授与された尊号の意味を，何らかの方法で理解していたという事になる。

Timūr は 1369 年，明の太祖の即位した翌年，西チヤガタイ汗国の混乱に乗じて蹶起した時，四人のサイィッド（マホメットの子孫）に祝福され，トランスオキシアナの唯一の実権者として，この Sāhib-i Kirān という尊号を授与されている。この尊号の意味は，「幸福な星の交会の際に生まれた君主」である。

この知識を，作者は主人公に，又一方，戦闘力のないペルシヤの王 Mycetes の人物表現に利用している。

Cos. Now to be ruled and governed by a man
At whose birthday Cynthia with Saturn joined,
And Jove, the Sun, and Mercury denied
To Shed their influence in his fickle brain!

（今や，ある男（=Mycetes）に支配され，統治されてはいるが，その男が誕生する時には，月が土星と結合したので，Jove や，太陽や，Mercury が自分たちの力を，その男の脳に流し込む事を拒否したのだ。）

ところが，主人公 Tamburlaine は，Nature に余り鼓舞されて，神以上にある王座へと慾望が高まる。始めは，「私は，神々の様に不滅になりたい。」(Tamb. May we become immortal like the Gods. I. ii. 200) と，未だ神に依存している範囲内で展開してゆく。

Tamb. Draw forth thy sword, thou mighty man at arms,
Intending but to raze my charmed skin
And Jove himself will stretch his hand from heaven
To ward the blow, and shield me safe from harm.

（お前の劔で突いて来い，汝勇武なる将兵よ，魔法で守られている私の皮ふをけずるつもりで，だが，そうすると，Jove が，自ら，天から手をさしのべて，その一撃をほかにそらしてしまい，私を安全に守ってくれて，傷一つ与えない様にしてくれる。）

ところが，Theridamas に，「神の使である Hermes でさえ，あなたほどに，感動的に説得する事は出来ないだろう」(Not Hermes, prolocutor to the gods!/Could use persuasions more pathetical. I. ii. 219–200) と煽てられて，予言の神が彼の心の中に定住していると信じ (I. ii. 211–2),「私の肉体が四成分に変り，魂と共に，天界の王座を熱望する」(Our bodies turn to elements,/and both our souls aspire celestial thrones. I. ii. 235–6) ようになってしまう。この時の imagery には後に述べる様に，成分の重量を意識し，鋭い言語意識が内在している。

その後，王位と神とを比較して，人類を征服しようという野慾を抱く。

Usm. To be a King, is half to be a god.
Tamb. A god is not so glorious as a King:
I think the pleasure they enjoy in heaven,
Cannot compare with Kingly joys in earth: (II. v. 56–59)

（ウスムカセン，「王になるという事は，半ば，神になることだ。」タンバレン「神とは王ほど輝かしいものではない：神々が天で楽しんでいる快びは，地上での王の快びと比較出来るものではない。」

これが第一部の大きな背景となつている imagery である。しかし，これが Marlowe の真意で

はない。彼は，ギリシヤ的 imagery で，第一に Nature，次に Fortune, Star，人間，という摂理を創作し，人間を征服する王が天界をも征服しようとする野望，征服慾が，奢り驕ぶる主人公の心に芽生えたところに悲劇にのびる胚芽が存在している。が，"*Dr. Faustus*" の最後の台詞と同じ imagery である。即ち，「道ならぬ事々には，ただ驚嘆だけしておいて手を出すな。だが，道ならぬ事々の深みは，この様な僭越な才子らの心を誘うもの，神様の御許しのない事はしなさるな[4]」と批判的である。

3. 道 徳 観

Marlowe が使用している Virtue, Power, Honour, Beauty という言語の中には，彼独自の imagery がある。

Ther. To wear a crown enchas'd with pearl and gold
Whose virtues carry with it life and death;
To ask and have, command and be obeyed;
When looks breed love, with looks to gain the prize,
Such power attractive shines in princes' eyes. (II. v. 60–5)

(真珠や黄金をちりばめた王冠を頂く事，その諸々の徳は，それと共に，生と死とをもたらす；要求し，所持し，命令し，服従される事，獲物を勝ち取る容姿と共に，人から愛される容姿をしている時に，その様な力によって王の目に光がたたえられるものだ。) 更に又，

That virtue solely is the sum of glory,
And fashions men with frue nobility. (V. ii. 26–7)

(徳は専ら栄光の総計であり，真の高潔さで男を作る。)

この様に，彼は徳と力とを混用している。こういう imagery は，前に述べたギリシヤ的思索の結果生れたものだと考えられる。

ギリシヤの Virtue とは，良心を中心とするキリスト教的道徳とは異なっていて，恥と体面とを重視している。かって，虐待され虐殺されたキリスト教信者たちは，Bajazeth の様に，檻の中に入れられてもそれに頭を自ら打ちつけて，脳味噌を出して自殺する様な事はしない。この様な社会的な恥と体面を主とする徳は，自然に，力と混同されるようになり，恥のために死ぬという考え方或は，Horemr 時代の恥意識というものは，罪意識と変って行く。このため名誉，Honour を重視するという結果になり，彼の作品の中には，この Honour という用語が必要以上に出て来るのである。Tamburlaine のあの傲慢性も，自負心と共に，更に又この名誉心と共に，武士道の一部として認められていた要素である。

Tamb. Your births shall be no blemish to your fame;
For virtue is the fount whence honour springs. (IV. iv. 131–1)

(お前たちの生れは，お前たちの名声には汚点にはならぬ；何故なら，徳が源泉であって，そこから名誉が生まれるのだ。)

すなわち，生まれが羊伺いの村に卑しい者であっても，徳，即ち，力があると，名誉が湧き出るのである。これは，一靴商鞣皮業者組合の一員であった John の子である Marlowe，さらに，大学で B. A. を授与され，国事に関係している彼自身の imagery であったと考えられる。

もっと良い例として，次の個所も挙げられる。即ち，第三幕，第二場で，Zenocrate は，頭書の Tamburlaine に対する軽蔑の念は次第になくなり，婚約者のことも忘れて，彼に対する感情は

彼女の心をつきせぬ，やるせない愛えと育て上げて行く (As it hath chang'd my first conceived disdain/Since a farther passion feeds my thoughts/With ceaseless and dis consolate conceits. III. ii. 12–3)。これを見て従者 Agydas は，彼女を諌め，苦しみ，恥じ，

More honour and less pain it may procure,
To die by this resolved hand of thine,
Than stay the torments he and heaven have sworn. (III. iii. 96–9)

(タンバレンや天が誓ったこの拷問を受けるよりは，この私の resolved…後述…した手で死んだ方が，より名誉であり，より苦痛が少ないだろう。)

と言って自殺してしまう。これを見て Tamburlaine の部下の Techelles は「何とこの男が，わが王の意企をいいあてたことよ」(see how right the man/Hath hit the meaning of my lord the King! III. iii. 107–8) といい，Usumcasane も，

Faith, and, Techelles, it was manly done;
And, since he was so wise and honourable,
Let us afford him now the bearing hence
And crave his triple worthy burial. (III. iii. 195–12)

(信義だ，テキリーズよ，彼は雄々しく死んで行った。彼は賢明であり，名誉ある者であつたから，彼に紋章を与え，人より何倍も立派な埋葬をお願いしよう。)

といって，お互いに，武士道を愛しているのである。

更に，Tamburlaine が Damascus を攻囲し，赤色で恐怖のどん落に人々をおとした時，四人の乙女たちを送る Governor は，名誉を再度口にして，

Lovely virgins, think our country's care
Our love of honour, loath to be enthrall'd
To foreign powers and……(V. i. 34–36)

(可愛いい乙女達よ，我が国の難事を，我々の名誉を愛する事を考えて，外国の軍隊の奴隷になることをきらって……)

といって，外国軍の奴隷となる事を恥としている。

Beauty にたいする imagery も Marlowe 独自のものがある。先ず，Beauty を the Muses の母としている (V. ii. 81)。

この the Muses とは，周知の通り，Calliope (弁舌と叙事詩の神), Clio (史・詩・歴史), Erato (恋愛詩), Euterpe (音楽・叙情詩), Melpomene (悲劇), Polyhymnia (聖歌), Terpsichore (舞踏と舞台合唱), Thalia (牧歌・喜劇), Urania (天文) の九人の女神のことである。ゆえに，Beauty とは，これらの神々の母，即ち，母体という imagery で，彼の独創的なものだ。

さらに，「美とは何だと，この私の苦しみはいっているのだ？」(What is beauty, said my suffering, then? V. ii. 97) という自問自答に対して次の様に述べている。

If these had made one poem's period,
And all combin'd in beauty's worthiness,
Yet should there hover in their restless heads
One thought, one grace, one wonder, at the least,
Which into words no virtue can digest. (V. ii. 106–10)

(もし，これらのものが，一つの詩の範囲を作り，あらゆるものが結合して，価値ある美を作っ

たとしたならば，最後には言語では表現出来ない様なある考えが，ある恵みが，ある不可思議なものが，彼等の頭の中をさまよい歩くだろう。)

更に，この台詞は続いて，

But how unseemly is it for my sex,
My discipline of arms and chivalry,
My nature, and the terror of my name,
To harbour thoughts effeminate and faint!
Save only that in beauty's just applause,
With whose instinct the soul of man is touched,
And every warrior that is rapt with love
of fame, of valour, and of victory
Must needs have beauty beat on his conceits, (V. ii. 111-9)

(だが，私という男にたいしても，私の軍隊の紀律や騎士道にたいしても，私の性格にたいしても，それに，私の名前の恐怖にたいしても，めめしい気の弱い考えを心にいだくとは，何たる見苦しい事だ！ ただし，この事だけはぬきにしてだ。即ち，美を正しく称讃し，その美の本能に男の魂がふれる，そうすると，名声，勇気，勝利を愛することに没頭しているあらゆる勇者たちは，必ず，美をして，自分の想像力を強く打たせる様にさせるにちがいない。)

と述べている。

美が詩人の頭脳に入り込むと，ある考え，ある不思議な考えを抱かせ，勇者の頭脳に入ると，Tamburlaine の様に奇想天外な想像力を抱かせ，実行力を授与するのである。即ち，勇者は，最高の業績を完成しようと望み，そのための原動力となる精神を推進するためにも，絶対に美の刺激が必要欠くべからざるものだと考えている。その刺激を，Marlowe は Zenocrate の美しい目に求めたのである。これを理解して始めて次の台詞の imagery が理解出来る。

Eyes, when that Ehena steps to heaven,
In silence of thy solemn evening's walk,
Making the mantle of the richest night,
The moon, the planets, and the meteors, light,
There angels in their crystal armours fight
A doubtful battle with my tempted thoughts
For Egypt's freedom and the Soldan's life,
His life, that so consumes Zenocrate; (V. ii, 84-)

(あなたの厳粛な，静かな夕ぐれの歩みが近ずいて，あの Ebena が天に足をふみ入れた時，あなたの目は，月，遊星，そして，流星に光を与える。そこで水晶の武器をつけた天使たちは，エジプトの自由と，ソルダンの命，即ち，ゼノクレート，あなたの心をその様に消耗させている父なるソルダンの命を守るために，私のこの星運がこもついている考えと，不安げに戦っている。)

これは，「美しいゼノクレートの目が美を促し，非常に理智的な黙想をかもし出す。そして，夕方には，天の発光体である月，遊星に光を与える。さらに，この月から Tamburlaine にはげしい光がなげかけられ，彼の野心的考えと対決する。」という意味内容が出て来る。

4. 生理学的 Imagery

生理学的見地より考えると，この作品は，彼の作品中最も進歩していない個所が多く目につく。先ず人体は四種類の成分から成立しているといった古典的な考え方から出発している。

「私たちの体が元素に変る (I. ii. 236)」とか，「私たちを四つの成分で作った自然 (II. vii. 18)」とか，成分 (Element) という言葉がよく出現している。

この四つの成分とは，周知の通り，fire, earth, water, air の事であり，さらに，四主液 (the cardinal humors), 即ち，blood, phlegm, choler, melancholy の配合具合で人間の体質や性質までが定まると考えている。mettle (II. vii. 17) とは，そういう意味を含めた人間の性質をいっているのである。例えば，ユーモア (humor) とは液体という意味を含んでいるが，この様な考え方は，当然 Aristotle の考え方である。

次に，死に対しても特種な考え方で，この成分と密接な関係を持っている。

And death arrests the organ of my voice,
Who entering at the breach thy sword hath made,
Sacks every vein and artier of my heart. (II. vii. 8–10)

(死は，私の発声器官を止めてしまう，そして，死は，お前…Tamburlaine… の劔が作った破れ口の中に入って行き，私の心臓のあらゆる血管と血液を奪ってしまう。)

この中で，発声器官を止めるという事は，四元素の中の空気を除外する事を意味し，血管・血液を奪うという事は，心臓を養なっているものを奪うことを意味している。

May never spirit, vein or artier feed
The cursed substance of that cruel heart; (Part II. IV. i. 178–9)

(精神，血管，或は，血液が，あの残酷な心臓の呪われた実質を，決して養なわないだろう。)

この場合の血液にたいする Marlowe の imagery は，勿論，水と熱の結合体だという事である。この結合体，即ち，四成分の構成 balance を破る事を resolve といい，この言葉が作品の中では，非常に多く使用されている[11]。

魂と肉体とを分離した imagery を作者は持っている。これは Aristotle と同じ様な考え方であって，次の様な個所がある。

My bloodless body waxeth chill and cold;
And with my blood my life slides through my wound:
My soul begins to take her flight to hell,
And summons all my senses to depart;
The heat and moisture which did feed each other,
For want of nourishment to feed them both,
Is dry and cold; and now doth ghastly death
With greedy talents gripe my bleeding heart,
And like a harpy tires on my life. (II. vii. 42–50)

(私の血のない肉体は冷え，つめたくなる／そして，血と共に，私の命は傷口から滑り出る。私の魂は，地獄につき落ち始め，私の感覚全部に，ばらばらになる様にと命ずる。お互い養い合って生きて来た熱と水分は，その両方を養うための栄養物が欠乏したので，乾き，冷たくなっている。そして，今や，恐ろしい死が，欲深い考えを抱いて，私の血の流れている心臓をつかむ。

Harpies のように，私の命をつかみ，八つ裂にする。)

この様に，死とは，乾き，冷たくなる事であって，水と熱がなくなったので，coldness と dryness だけになったと考え，imagery の中には四成分の中の土だけが残されている。これが死であり，成分を破壊する事である。故に，「キリスト教信者の大虐殺」といわないで quick havoc of the christian blood (III. iii. 58) という表現が生れる。

では誰が死を与えるかという問題にたいしては，作者は，死神を登場させている。乙女達を殺害しようとする Tamburlaine は，

For there sits Death; there sits imperious Death,
Keeping his circuit by the slicing edge.
He now is seated on my horse men's spears,
And on their points his fleshless body feeds. (V. ii. 48–52.)

(死神がそこに坐っているぞ。そこに，横柄な顔をして死神が坐っている。人を切り切ざむその刃で死神の巡回裁判を続けている。その死神は，今や，私の騎兵達の槍にとまり，その槍先の上で，死神の肉のない体は獲物を食うのだ。)

この様に，槍先で，真赤な姿をして坐っている彼の召使である死神に四人の乙女たちを見せる様にと命ずるのである。その後「乙女たちを殺したか？」とはいわずに，「死神に見せたか？」(What, have your horse men show the virgins Death?) といっている所は，彼の独創的な技巧を見せてくれる。

更に，Marlowe の魂とは，永久に動的なものであり，無限に慾望というものを追求するものである。

5. 地 理 的 Imagery

後の画く地理的 imagery にも，彼独自の特色がある。第一に，他の作品に於ても同様な事がいえるが，Asia という名称が数多く出現して来るが，小アジヤをさしているという事である。更に，彼のいう東洋にも特別の image を持っていて，例えば，"*Dr. Faustus*" の中にも Orientis princeps (I. iii. 18) という言葉が出て来ているが，Asia, Orient という言葉から来る印象は，野蛮，残虐，無知そのものであり，極端な imagery をとった場合，地獄と変化している事である。例えば

I, John Faustus, of Wittenberg, Doctor, by these presents,
do give both body and soul to Lucifer Prince of East. ("*Dr. Faustus*" I. iii. 40–1)

この Lucifer とは地獄の大王の事である[2]。彼の imagery はその時，その場所によって変動し，Asia も小 Asia と固定した概念を持たず，時としては，地中海をもさしている。もっとも，Marlowe ばかりでなく，当時の一般大衆がその様に理解していたのであるが。

先ず，Tamburlaine の登場している地理的位置と，Asia の範囲を考えてみると，

Mean. Oft have I heard your majesty complain
Of Tamburlaine, that sturdy Scythian thief,
That robs your merchants of Persepolis
Trading by land unto the Western Isles,
And in your confines with his lawless train
Daily committs incivil outrages
Hoping (misled by dreaming prophecies)

To reign in Asia, and with barbarous arms
To make himself the monarch of the East:
But, ere he march in Asia, or display
His ragrant ensign in the Persian field, (I. i. 35–43)

(陛下が，タンバレンの事を，即ち，あの頑強なスキト人の盗賊の事をこぼされているのを，今迄しばしば耳にして参りました。そ奴めは，陸路西部都国と貿易している陛下の臣であるパーセポリスの商人たちを強奪して陛下の領土内で，毎日無法行為をし，不法暴行を犯し，夢の様な予言に迷わされて，アジヤを手に入れようと望み，野蛮な武器を持って，自ら東洋の君主にならんとしている。しかし，奴がアジヤに進軍する前に，或は，彼の放浪者の持つ旗をペルシヤの野に誇示する前に……)。

歴史的に，Hormuz (旧 Ormuz) は Persia の南部にあって支那や印度の商用船舶が入港しており，さらに，Goa も各国の船舶が入港していて，英国とペルシヤの同盟商隊が北方 Caspian Sea の方から大陸を横断して Hormuz に来ていた。上文の陸路西部諸国との貿易とは不可能となり，Marlowe は地理的に間違った imagery を持っていた事になる。しかし，これによって，先ず大体の位置が推定出来，さらに，次の，

You that have marched with happy Tamburlaine
As far as from the frozen place of heaven
Unto the watery morning's ruddy bower,
And thence by land unto the terrid zone, (IV. iv. 124–7)

(幸運なるタンバレンと，天の凍結している海岸から，はるか遠く，水辺の赤い主錨まで，それから，陸路熱帯まで，今迄行軍して来た諸君)

という台詞と，

Then, having passed Armenian deserts now,
And pitched our tents under the Georgirn hills. (II. ii.)

(アルメニヤの砂漠を通り，ジョージアの山々の麓にテントを張って)

という台詞から，Tamburlaine は Caspian Sea の北部から西部に進み，コーカサス山脈を越えて，ジョージヤ，即ち，黒海とカスピ海との間で合戦したという事が推定出来る。Tartary, Scythia が Tamburlaine の，この劇における出発点であるが，この地方は，当時の Elizabeth 時代の人々には極北にあって雪と氷に閉ざされていたと考えられていた。作者 Marlowe はこの Tartary と Scythia に対しては，同一の imagery を持っている。であるから，Tamburlaine のことを，the sturdy Scythian thief)I. i. 36) とか，Where is the Scythian Tamburlaine? (I. ii. 152) といっている一方，the great Tartarian thief (III. iii. 171) ともいえるという事になる。

その後主人公は，ペルシヤを征服し，Zabina, Ebea, Fez, Morocco, Argier を支配しているトルコ皇帝 Bajazeth を捕虜にし，彼を虐待し，自殺せしめ，他の者たちに，Tamburlaine is Lord of Africa. (III. iii. 202) といわれ，彼自身も，次の様に望む様になる。

Those walled garrisons will I subdue
And write myself great lord of Africa. (III. iii 244–5)

(私はその様な城壁でめぐらされた守備隊を征服し，自らアフリカの偉大なる王になるのだ。)

この様に，カスピ海の北西部から，地中海，アフリカと地理的 imagery は拡大し，次には，この様な現実的限界を超越し，天文学的次元に没入し，運命の神をしっかりと鉄の鎖に縛りつけ，中

世的な，宗教的な世界を創作して行くのである。

ここで，彼は独創的な技巧を使用して，その次元の転換に成功している。

Tamb. I will confute those blind geographers
That make a triple region in the world,
Including regions which I mean to trace,
And with this pen reduce them to a map,
Calling the provinces, cities, and towns
After my name and thine, Zenocrate
Here at Damascus will I make the point
That shall begin the perpendicular; (IV. iv. 77–84)

(この世界に三つの大陸……アメリカ，アジヤを含むヨーロッパ，及びアフリカ……を置いている様な盲目的な地理学者に反論して，私が突止めようとしている地域を含め，それを，このペンで一枚の地図に縮少し，その国々，町々に，私の名前，それにあなた，ゼノクレートの名前をつけて呼ぶのだ。そこで，私はダマスカスを経度 0° の点と定め，天空に垂直面を立てるのだ。)

この経度 0° にするという考えの中には，現代の英国のグリニッジ天文台を通る子午線 (0°) を image に画き，地球全体を宇宙から見る，支配するという image であって，太陽を征服し，自分を太陽に置換している事は明白な事である。これは次の台詞からも知り得る。

Tamb. For I, the chiefest lamp of all the earth
First rising in the east with mild aspect,
But fixed now in the meridian line, (IV. ii. 36–8)

(私が全地上の最たる光明であって，温和な容ぼうをして，先ず東に昇り，現在は最高点である子午線内に定着しているのだから)

この imagery は東方から西方に向って征服しているという事と，太陽が即ち自分であるので定着しているという事である。

この様に地球上の人間を支配するためには高度が必要となって来るが，精巧にも，作者は，この高度を三つに区分している。the triple regions of the air (IV. ii. 30) がそれであって，imagery としては，理論的に空気層，大気層，天空の三つだと推定される。この様に，Marlowe の地理的 imagery は，半ば天文学的 imagery である。

6. 宗教的 imagery

この問題については，Timūr，作者，作中人物，更に，歴史的宗教事実といった四方面からの検討が必要である。

先ず Timūr とは，もともと，成吉思汗の偉業に傾倒するモーコ人であると同時に，Allāh の神を唯一絶対の神とするイスラム教の勝利を確信するトルコ人でもあった。したがって，Timūr の宗教的理想は，イスラムの世界を建設し，これを媒介として，蒙古世界帝国を再建しようというところにあった。元来，この成吉思汗が崇拝しており，超自然な世界と強い関係をもっているシャーマン教と，今述べたイスラム教とは相矛盾する宗教的要素を内蔵している。

1405 年 2 月，Timūr が明朝征服に出発し，その途中で，オトラルで病死しているが，この明朝とは，周知の通り，偶像(崇拝)教徒である。イスラム教は，この偶像崇拝を否定し，時には，戦争の糸口にもなっている。一方，このキリスト教にも偶像崇拝の底流がある。

作者 Marlowe は，前者のシャーマニズムの中に主人公を織り込み，他の宗教を無視し，自然の霊を人間 Tamburlaine の中にのりうつらせ，彼の肉体をかりて，種々の行動をとらせようという根本的な宗教的 imagery を持っていた。

それ故，この様な状態にある主人公は神がかりの状態に充分なり得るし，一方，他宗教信者，例へば，キリスト教徒やマホメット教信者にとっては，中世的な，何か Termagant の様な感を与えるであろうが，その imagery も終始一貫しているものではなく，神えの依存から，神の征服えと展開している。

ペルシャの王は Jove を，Zenocrate，トルコ皇帝 Bajazeth，その妻 Zabina，及びエジプトの王 Soldan は Mohammed を信じている[12]。さらに the cruel pirates of Argier (III. iii. 55) とある様に Argier ではキリスト教徒を迫害している (III. iii. 55–58)。即ち，Tamburlaine はシャーマン教で，マホメット信者を迫害し，キリスト教信者は又，彼等に迫害されるという imagery である。

では，Tamburlaine が口にする神とは何であろうか。

Tamb. The Chiefest God, first mover of that sphere
Enchas'd with thousands ever shining lamps, (IV. ii 8–9)

(神の主，即ち，数限りなく永遠に輝く光でちりばめられたあの最初の動体は，)

とあって太陽を暗示している。しかし，Marlowe の太陽に対する imagery はもっと独創的なものであって，圧迫する，威圧する，優勢であるという概念が含まれていて，その中に，前に述べた四つの成分に関する概念が含まれ，数量，力量，勢力，さらに，三重の層の上位にあるという image を含んでいる。こういう imagery を一言で表現されているのが，第五幕第一場 45 行目の the over-weighting heavens である。

地獄，極楽についても複雑精巧な imagery を持っていて，例えば，Cimmerian Styx (V. ii. 171) の Cimmeriane とは，Hormer の詩によく出て来る世界の西のはての霧と暗黒の世界であって地上のものであり，一方 Styx とは，周知の通り，よみの国を七周りするという死の国に入る川の事で下界のものである。

極楽について述べると，Gihon's[13] golden waves (IV. ii. 60) では，Oxus と極楽の両方を想像し，中央アジヤをも意識している。

7. 資料と改作

資料である Timūr の歴史的記録の概要を述べると次の様になる。

1336 年 4 月サマルカンドの南方の山間の一都会 (Kesh) 渴石(ケシュ)の近郊で生れた。この出身については，二つの説があり，成吉思汗の周族の名家の後裔だとする説と，名もない，一牧人の子だという説である[14]。中国では帖木児と書き，ヨーロッパ人がタメルラン Tamerlane と呼ぶのは，イラン人がチムール・ラング Timūr Lang (びっこのチムール) とあだ名したものがなまったものである。しかし，事実としてはせいぜいトルコ人化したいわゆるチャガタイ，トルコ人の小貴族の家に生れたというクラビホの伝聞が最も正しい様である。

1369 年，明の太祖の即位の翌年，西チャガタイ汗国の混乱に乗じて蹶起し，前に述べた様に，Sāhib-i Kirān の尊号を受けた。その後東チャガタイ汗国を降し，イル汗国を併わせ，キプチャク汗国を従えている。

1380 年，ペルシャ方面の遠征を計画，その頃のペルシャは Ilkan 国最後の君主たる Abu Said の歿後，幾多の小邦に分裂して，秩序が乱れていた。

1389年，Ispahan を占領してペルシャの東半を併有する事が出来た。その後欽察の役が終って1392年に，ペルシャの西半を征服しようとしたが，Caspian Sea の南岸なる Mazanderan 附近を取り，翌年南に向って進軍，Shiraz を占領し，西に転じて Baghdad を攻撃し，スルタン，Ahmed を追って，これを略有している。

1394年，北方に進み，Georgia を征服した。この時，欽察の役で彼に背いたトカトミシュが再び抗戦したので，これを Caucasia 地方で撃破，その者を位から却けて，その敵手ウルスを立て，次いで，Moscow の領土に入って，Dnieper 河畔に達した。

1396年，サマルカンドに凱旋し，勢威西方及びカスピ海の南北みな彼の足下に拝跪した。

1397年，印度に対し遠征軍を起し，1398年，親ら兵を卒いて Hindukush 山脈を越え，Cabul 方面より Indus 河を渡り，Dehli に向い，Jumna 河畔で，スルタン，Mahmud 軍に会して，大いにこれを破り，直ちにデーリに進んでこれを占領した。

1399年，トルコ (Ottoman Turks) を討たんとして，西軍，Aleppo（バグダット・アレッポ）Damascus を経て，小アジヤに向い，1402年，Angora に行軍して，難攻不落の都市を征服し，スルタン，Bayazid の軍を破った。ここで，彼の領土は東はガンガ (Ganga=Ganges) 河の上流より，西は地中海に及んだ。更に征服慾旺盛な彼は，支那，明帝国への遠征を企て，1405年の初め，Amu Darja を渡り，Otras に到り，ここで病のため，2月17日に，広大なる土地をすてて永眠した。

彼は少年時代，家畜泥棒をしたため受けた私刑でびっこになったという説もある。しかし，7歳の時からアラビヤ語の教育を受け，陣頭に立ってからも文事に対する趣味を持っていた。20歳の時，Ameer Kurgan の孫女 Aljaz Turhhan Aga を娶った。

「成吉思汗は破壊し，ティムールは建設した」といわれている程，特にサマルカンドを熱愛しモンゴル族の征服やその後の内乱による荒廃から立直おらせ，この地は文化の中心となっている。

Timūr の容姿は，勿論，身軀長大，雙肩裕にして長髯美しく風に動き，眞に英雄の風貌を具えていた。

即ち，この作品の様に婚約者のある女性を力で娶り，強盗，虐殺，暴君という imagery はなく，むしろ，虐主暴君より人民を救うのが目的であった様だ。戦に次ぐに戦を以てした時，一部には野蛮なる戦勝者という感を与える可能性があるが，戦陣の間に吟咏を試み，学者・詩人を尊重して，一時トルコ文学の盛運を開いた淵源が，実は彼 Timūr なのである。

作中の Tamburlaine は頭書において旅人を掠奪するところから開幕されているが，実際では，破壊したといわれる成吉思汗でさえ，永遠の蒼天の感力なる加護を信じた成吉思汗でさえ，その西征の原因は，隊商とともに答礼使を Amn 河三角州にあるトルコ種王朝フワーリズム国に遣し，交易関係を樹立しようとした時，反対に，隊商は Otrar で掠奪され，或は，知事の命令で虐殺されたところにあるのである。作者の image の中にはこの両者が融合されている。

8. 資料と芸術性

作品の価値は，その資料の多様性と正比例する，といっても過言ではない。以上述べて来た様に，使用する言語を芸術化するのに適切な imagery を充分に内蔵している蒙古人であり，かつ又，シャーマン教徒である Timūr を資料として着眼したところに，作者 Marlowe の劇作家，いや，詩人としての心を発見し，更に，Timūr の持つ観念，性格，社会的，心理的体験を Marlowe 自身の間接的な経験として，一度は，融合同化して，その後，その複雑なものを緊密に，独創的に統合したところに，彼の芸術性を見い出すのである。

この事は，現代作家にも，次の様な一種の規範を示してくれる。即ち，芸術として評価出来る文学作品の材料とは，一つの水準においては，言語であり，もう一つの水準においては，人間行為の体験であり，さらに別の水準においては，人間の観念と態度であるという事を。

Marlowe の言語にたいする imagery は，言語とは新鮮であり，常に注意がはらわれなければならず，人の心を奪うものでなければならない，という事である。人の心を奪うためには，彼は次の様に考えた。即ち，古語の方向に，或は，縁の遠い方向に，或は，野蛮の復帰とでもいいえる様な，残虐な，むしろ，原始的な方向に様式化しなければならないというのである。そこにあるものは，空想力の統合であり，統合されている資料の量であり，多様性である。その統合も緊密度がなくてはならず，その多様性，複雑性というものは，第一に，内蔵している imagery の量であり，主題であり，基調であり，筋であると同時に，語法，文章論，作詩法を重視するという事である。

高度の価値をもつ作品とは，この様に，高次の構造においても，やはり，複雑なものであるがその複雑なものを，時代的な釣合，或は，妥当性という感覚で把握しており，「大衆に味あわれ，かつ，楽しまれる作品」を創作しようとした Marlowe の技能も，価値評価の対称とすべきである。

Shakespeare の作品ばかりでなく，一般に，Drama においては，筋，性格描写，言語，リズム順次明瞭化してゆく意味内容，といった要素が重要な骨子となるであろうが，対称とする大衆の智的素質をも考慮に入れてこれらの要素のいずれを重視するかという事であって，大衆の人気を得たという事は，頭書より "*Hamlet*" の様な作品を意企していたのではない，という事である。この事を度外視した場合，筋，或は又性格描写が不十分だと評価される可能性がある。Prologue に述べている様に，作者は，言語を常に意識し，美しい Blanck Verse を大衆に披瀝しようというのが第一の眼目である。即ち，rhetorical description である。Manage words with her, as we will arms. (III. iii. 131) (武器を上手に使う様に，彼女と言葉を上手にあやつってくれ) といい，この作品の中にはその雄弁術の最高の範例を示そうと作者が力を集中した個所が随所に感じられる[15]。

彼は，この雄弁の中に，独自の警告的，予言的要素を入れ，時には metonymy[16] (転喩) という技巧を使用している。しかし，大獅子の様な台詞の途中，突然，急変降下するという欠点は，やはり認めなければならない

Tamb. But go, my lords, put the rest to the sword
Ah, fair Zenocrate, divine Zenocrate, (V. ii. 71-2)

(行くのだ，諸公よ，他の者たちに戦の準備をさせい。おう，美わしきゼノクレートよ，……)

しかし，この様な欠点は余りにも些細な事である。彼の意企したものは，残酷性，大虐殺の現場を演じることなく，言語という強力な武器で表現しようとしたし，又出来ると自負した事である。作者は，舞台上で，一度も流血的残虐行為を主人公にさせていない。例の四人の乙女たちの虐殺も同様である。想像の場を，より以上に強力に表現するためには，言語の方がより効果があると考えさらに，彼の imagery の中では，肉体的苦痛よりも，精神的苦痛に重点を置いている[17]。

作者 Marlowe は大衆の心の持主であった。imagery の中には，常に主人公と一定の距離を保っているというのが他の作品にも察知出来る特色の一つである。一般大衆の心の中には‘闘争的であり，残酷な本能が潜在していると同時に，この様な驕慢な者が没落して行く過程にも快感をあぢわうという事である。この imagery はギリシャ悲劇型式の一部であって，Tamburlaine が絶頂に到達した時，大衆は，又作者は，ひそかに，彼の衰頽を希望し計画していたのである。

この様に考えると，彼は第一部のみでは完成した作品だと考えていなかった，と断定出来るしこの一部は中断されたものである，ともいえる。現に，第一部の最後は，征服に征服を重ね，美し

いゼノクレートと結婚式を挙行する所で終っている。Prologue で言及している様に，この作品は悲劇なのである。多くの批評家は，「第一部が余り好評なので，それに答えて第二部を書いた。」と述べているが，これは不合理である。(39. 4. 16)

参 考 文 献

1) "Christopher Marlowe の生涯" 拙稿：北海道学芸大学紀要 (第一部)，昭和 35 年 2 月，第 10 巻，第 2 号。
2) "*Dr. Faustus* に於ける悪魔の意義" 拙稿："北海道英語英文学" 第 5 号。
3) "Shakespeare 以前の劇作家. C. Marlowe の場合"：昭和 33 年 12 月，北海道学芸大学紀要，第一部。
4) "C. Marlowe 作 *Dr. Faustru*" 拙稿：昭和 35 年 8 月，同大紀要，(第一部・A) 第 11 巻，12 号。
5) "C. Marlowe の思想" 拙稿：昭和 34 年，柏倉教授還暦記念論文集，北海道英語英文学会，その他，北海道英語英文学会で発表 (昭和 33 年)。
6) PLATO：Loeb Classical Library 版。Timaeus, Critias, Cleitophon, Menexenus, Epistles.
7) OVID：Metamorphoses. Loeb Classical Library.
8) Plato や Aristophanes, Horace などが述べている魔法の国の毒薬のこと。
9) Frinyes に人間の目に見えない力を与えている意義に注意。
10) 作者の間違いか？ my＝his.
11) 第一部で resolve の使用されている個所は，Text 中，I. i. 118., I. ii. 101, II. ii. 18, II. vii. 24, III. ii. 98, V. ii, 79, 209, 398.
12) Text 中，III. i. 54, III. iii. 195, III. iii. 208, IV. ii. 75, V. ii. 17 etc. 参照。
13) Gihon とは Eden とも解されると共に，中央アジヤ Pamir 高原に端を発し，北西方 Aral 海にそそぐ河 (2,250 km) Oxus とも解される。
14) 世界歴史事典，日本大百科辞典，その他の歴史書参照。
15) Text 中，V. ii. 98–127.「美とは何だ？」の後。更に Tamb. の容姿，相手を説得させる時，苦しみの表現，征服慾の表現，虐殺の現場を出さず，それを言語で表現する。etc.
16) Text. V. ii. 34 の bloods, 或は Condensation.
17) 例えば，檻に入れられて引き廻されたり，足台にされたり，大衆の目前で残飯を剣の先で食はされる Bajathes 王の如きもの。